

サムエル記上1章20節～28節

●新年を迎え、私たちは希望を持って新しい年の歩みを始めたいと思っておりますが、日本ではコロナの第八波がピークを迎え、政治の世界にも混沌とした状況があります。また身の回りにも苦しみや病、弱りを覚える家族や友も多く、祈る課題が山積みです。このような中で、どのように主に委ね歩いていくことができるのか、聖書より共に考え、神様からの励ましを受けたいと願います。

●本日の聖書はサムエル記ですが、このサムエルが生まれた時代は「その頃、イスラエルには王がいなかった。そしてめいめいが自分の目に正しいと見えることをおこなっていた。」(士師記21:25)と記されているような混沌とした時代でした。

そのような時代にあつて、サムエルは誠実に神を求め、その言葉に忠実に聞き従って歩んだ預言者だったのですが、このサムエルを産んだ母「ハンナ」こそが主に尋ね求めた人物であり、また主に委ねた人物でした。

●ハンナは大変な苦悩を経験した人物でした。夫のエルカナの間には長く子どもが生まれず、そのことでもう一人の妻ペニナがハンナを苦しめました。ハンナは食事も喉を通らないほど悩み苦しんでいました。そんなハンナがある時神殿で激しく泣いて祈り、そこで祭司エリに「安心して生きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いを叶えてくださるように」という声をかけてもらい、その後サムエルが生まれたのです。

●「サムエル(シエムエール)」という名前は表面的に見るなら、「その名は神」となりますが、これはヘブル語の「願う(尋ね求める)」という言葉「シャアル」に由来します。そして、ヘブライ語では「ゆだねる」という言葉も「願う(シャアル)」という同じ語幹を持っており、願うことと委ねることは密接に関係していること表しているのです。つまり、「委ねる」とは全て任せて何もしないということではなく、生きて働いておられる神を信じ、諦めずに願い求めつつ生きることなのです。ハンナは激しく祈り求めたからこそ、生きておられる神を知り、そこに委ねることができたのです。

きっとサムエルは母ハンナの信仰者としての生き様に深く触れて預言者としての歩みを続けていったのだと思います。思えばイエス様もまた混沌とした世の中を主に委ねて生きられました。同時に父なる神に信頼し、叫び祈るような歩みを弟子たちに示されました。そのイエス様の姿、ハンナの姿に励ましを受けつつ、諦めることなく祈り続け、主に委ねる歩みを今年も続けていきたい。そう願います。